

日本福音ルーテル教会

■2011年4月15日 発行

■日本福音ルーテル教会事務局 広報室 〒162-0842 東京都新宿区市谷砂土原町1-1

TEL 03-3260-8631

■URL http://www.jelc.or.jp/ ■E-mail koho05@jelc.or.jp



イースターを迎えます

イースターがやってくると、 いよいよ本当の春がやってきた ように思います。新しい命の季 節を迎えたような気持ちです。 そしてイースターといえば「卵 探し」です。復活祭の楽しいイベ ントになっています。私のとこ ろでは、教会前大通りにイース ターエッグ(ゆで卵)を300個 かくしておきます。復活祭礼拝 のオルガン後奏が終わるとすぐ に大通りに飛びだしていき、1 00人で卵探しをしています。 最近では地域行事になったよう で、気がついたら町内の人々も 参加してくださっています。イ エス様の復活を地域全体でお祝 いするイベントになっており、 お祭りのようです。

あるとき、黙想集実る人生」に次のような文を見つけました。

「外面の静けさと内面のあらし といった対照的な状態がよくあ ものです。重要なのは、どこにいる か、ではなく、なにを考えている か、ということです」 イエス様 が死からよみがえられた復活 の 朝、弟子のペトロは婦人たちから 知らせを聞き走って墓を見に出い けています。ペトロにとって、この 知らせは内面のあらしではなか たかと思います。十字架の上で死 んだイエス様が墓の中におられ いのです。外面上は静かな時間が 過ぎていました。イエス様は十字 架の上で死なれたのです。この大 きな出来事に打ちのめされていた 弟子たちは失望と悲しみの中はい たのです。 ペトロは空っぽの墓 をのぞいたとあります。そこには 亜麻布しかありませんでした。こ のとき何をペトロは考えていたの でしょうか。大切なことは、この出来事を前にして何を考えたかということです。いったい何を教えられているのか。ペトロはそこでイエス様の「三日目に復活をするという言葉を思い出したのです。イエス様のみ言葉のとおり、その出来事が確実におこったことを信じたのです。 復活は私たちに喜びをもたらします。私たちもまた同じように復活させてくださる希望を与えてくださったのです。これが、救いの完成なのです。

良寛さんの詩に次のようなものがあります。「花開くとき蝶来たり、蝶来るとき花開く」 あたりまえでないことですが、あたりまえでないことってたくさんあります。花が開くときに蝶はやってくる。誰が教えたわけでもないのに。そとでまた、蝶が来るころになると花が開く。これまた誰が教えたことで見る目をどれくらいの人がもっているのでしょうか。この日常に感謝出来る人がどれくらいいるのでしょうか。

東北関東大震災が起こりました。あたりまえの日常がいつ戻ってくるでしょうか。イエス様は復活していまここにおられます。その復活のイエス様が被災された方々、遺族の方々と共におられます。かならずあたりまえの日常がやってくると信じて歩みましょう。復活のイエス様は共におられます。(Y.T)

「オーバーアマガウ・キリスト受難劇」を鑑賞して

10年に一度南ドイツの小さな村オーバーアマガウ (人口 5,000 人) で行われる世界最大のキリスト受難劇「オーバーアマガウ・キリスト受難劇」。昨年7月、ルーテル教会のフィンランド旅行団の一行は、途中ドイツに立ち寄り、この歴史劇を鑑賞しました。1632年に近隣の街でペストの大流行のあと、この街までそれが及ばなかったことを感謝して1634年より始まりました。出演できるのはこの街の出身者か長年の住人に限られますが、10年に1度の祭りとあって、世界中から多くの観光客が押し寄せます。



昨年の7月8日金曜日、日本・ フィンランド交換宣教ツアー参 加者30名は、ツアーの大きな目 的の一つであるオーバーアマガ ウ受難劇を観賞するため、南ド イツの小さな町にいました。小 さな町は、10年に一度行われる この受難劇を見るために世界中 から集まってきた人々であふれ ていました。ディズニーランド のようなメインストリートを抜 けると、5千人も入る大きな、 素朴な劇場がありました。入場 を待つ間にも、出演者と思われ る村人や家畜などが近くを通っ ていきます。

いよいよ劇の始まりです。 「万歳、万歳、ダビデの子!」「ホ サナ、ホサナ、いと高き所に神 の栄光が!」

イエス様のエルサレム入城場面で、舞台は出演者でいっぱいです。そのうちイエス様の神の子論争が始まります。しかし、出演者は同じような服装でドイツ語のセリフです。客席では事前

に配られたドイツ語と英語のテキストを見て理解していきますが、残念なことに私にはよく分かりませんでした。

2 時間半の休憩をはさみ、6 時間近い劇の中で、強く印象に残っているのは、始まりのエルサレム入城と十字架にかけられるイエス様の場面です。セリフの理解は十分できませんでしたが、いつか聖書の学びを通して、舞台の上で語られていたセリフ部分を日本語で埋め、改めてオーバーアマガウの受難劇を味わっていきたいものだと思っています。

栄光教会会員 櫻井 隆

南アルペンの人口 5 千人余りの小さな村オーバーアマガウで受難劇を鑑賞する機会に恵まれました。5年の準備をかけてノーメークで演じる生身の人の舞台はとても臨場感がありました。舞台の暗転の度に旧約聖書のお話がタブロー(活人形)でセッ

トされます。それは圧巻でした。 村には木彫りの優れた技術が あってイエスやマリアの姿を 彫って売っています。その技術 が生かされているそうです。1 0年に1度西暦の末尾が0の年 に上演される受難劇のチケット は入手困難とささやかれていま した。昨年は41回目でした。鑑 賞できたことは幸運だったと感 謝です。受難、十字架のイエス、 イエスの叫び「エリ、エリ、レ マ、サバクタニ」人間の罪の深 さを改めて心に留めました。復 活の場面がとても静かに思えま した。その静けさがひっかかっ ていて立山先生にお伺いしまし た。日の出の前の黎明を思って ください。復活をその情況に重 ねて見えないでしょうかと説い てくださいました。

高山の夜明け前、暗く寒く静かです。東の山の端がかすかに紅をおびてくる、秒単位で濃く染まっていく黎明の数分を想い起しました。福音の恵みが湧いてくるようです。

368 年前、オーバーアマガウの村人はペストの終息を願って祈りました。今、急速に変化している自然界、世界情勢も不安定、身近でもウイルスや核の脅威と不安はいっぱいです。

主よ憐れんでください、主よ 平和をお与えください、と祈り ます。復活祭はもうすぐです。

東京池袋教会会員 坂根耀子



『イエスご自身が彼らの真ん中に立ち、「あなた方に平和があるように」と言われた。彼らは恐れおののき、亡霊を見ているのだと思った。そこで、イエスは言われた。「なぜ、うろたえているのか。どうして心に疑いを起こすのか。わたしの手や足を見なさい。まさしく私だ。・・・」』(ルカによる福音書 24章 26-39節)

ウィーンでとある国際機関に 勤務していた30年ほど前のことです。4月の初め、家族でスキー旅行から帰宅してみると、玄関前に美しく彩色された卵やチョコレートで一杯の花模様のバスケットが3個置かれていました。不審に思っているうちん、それらはアパートの大家さんから届けられた3人の子供たちへのお祝いだということが分かりました。山間のスキー場はなお吹雪に見舞われていましたが、山を降りると、野は 草木が萌えやわらかな陽光に包まれていました。街はといえば厳冬を耐えて待ちわびた春の到来とともに迎えるイースターを祝う人々の喜びにあふれているようでした。

イースターが当地ではクリス マス以上に熱狂的に祝福されて いることに驚かされました。日 本にいては、まして洗礼を受け る前の私には想像できないこと でした。イエスが十字架の死か ら蘇り、その身体を弟子たちに 現しながら、いのちは永遠であ ることを証した「復活」がなけれ ばキリスト教は存在しなかった といわれます。イースターが重 要視されるのは当然のことで しょう。しかし、当時すでに聖書 を紐解きながら、私は、圧倒的な 力を持って迫ってくるこの奇跡 の物語には戸惑うばかりでし

私が洗礼を受けたのはウィーンから帰国後しばらくしてのこ

とです。「復活」すなわち永遠のいのちを信じる道を歩む選択をしたことになります。人の心に絶えず空洞が巣食うとしたら、それは死によって自らのいのちは途絶えるといったむしろ生物学的な死の概念に支配されることによるでしょうか。そんな空洞を満たしたい。私の選択の背景にはそのような希求があったのかもしれません。

その後取り組み始めた稲の自 然農法研究を通しても多くになる のありようを学ぶことにるるとになる。自然農法で栽培に適応によるで ます。自然農法で規境によるで がりまする環境によく適応によるで の生命を全うしていきます。の 生命を全うしていきは本来の によう。人や動植物を含むもの というのものないのちは がりあっていのちは がりあっていのちは という聖書の示唆も 今はで というました。

イエスの復活に遭遇したとき、 絶望感で心を硬く閉ざし身を潜 めていた弟子たちは、驚愕し戸惑 いを隠せません。しかし、やがて その心は大きく開かれ春の光に 包まれるエルサレムの地を躍動 し、歓喜に震えながら、広い世界 に向かってイエス復活の証しの 旅に立ち上がって行きます。

今、私たちはイースターの緑萌 える空気の中に、大きな時間の流 れを超えて、あの弟子たちの心の 震えを感じ取ることはできない でしょうか。それは、何よりも私 たち自身が、いかなる困難にも耐 えて生き抜き、そして、いのちの 復活を果たすことができるとい うゆるぎない希望を伝えている はずです。



私はカナダ在住の折にウクラ イナからの移民の女性から美し いイースター・エッグを教えて いただきました。ウクライナの イースター・エッグで良く知られ ているのはクラシャン カ (Krashankaとピサンカ (Pysanka) です。クラシャンカは「色」を意 味するクラスカ (kraska) という 言葉に由来し、鮮やかな単色で 染められた卵で す。ピサンカは 「描く」を意味するピサティ (pysaty) という言葉に由来し、 卵の上にデザインが描かれ様々 な色に染められま す。卵は復活 祭に教会で祝福してもらい、友 人と交換したり子どもたちや家

族、恋人に贈ったりします。

ピサンカの色や描かれる + チーフには意味が込められ ま す。たとえば卵の周りをぐるっ と囲む線は永 遠、魚はクリ ス チャン、葡萄は豊かな収穫を表 します。ピサンカは主に女性 た ちの手仕事で す。冬の夜子ど も たちが寝静まった後、女性たち は時には歌を歌いながら祈りを 込めて模様を描いてゆきます。 卵を作る日は噂話や争いごとを さけ、家族にはやさしく、母親は おいしい料理を作るなど心の清 浄が前提とされるようです。



ピサンカはろうけつ染めの重ね 染めの要領で絵を描いてゆきます。キストカという金属の小 さ な漏斗がついた筆記用具を 使 い、ろうそくの火で溶かした蜜 ロウをペン先につけて白い卵の 上に絵を描いてゆきます。まず、 白く出したい模様をロウで 描 き、次に黄色の染料に浸け卵が 黄色に染まったら黄色に残した い所を描き、同様にオレンジ、赤 と描き重ねてゆき最後に黒に染 めます。黒く染まったタマゴを ろうそくの炎の横に近づけ、ロ ウがとけてきたらティッシュで まめにふき取ってゆきま 真っ黒な卵からロウをふき取る たびにあざやかな色とモチーフ が顔を出し、闇から光を見出す ようです。ウクライナのイース ター・エッグ作りは心ときめく 手仕事です。



和田雪香(小鹿教会)

Lutheran Church

教会はあなたのおいでをお待ちしておりま